

平成二十六年広島県学校給食研究大会

(八月十一日 竹原美術館文化創造ホール)

学乳の飲用率一層高まって・・・ 牧場体験の「素晴らしさ」を学校給食現場へ



給食関係者ら約百九十名が出席した。

大会の趣旨は、学校給食に関する諸問題について研究発表及び現代的課題に関する講演等を行い、学校給食の充実を図ることとしており、このなかで事業説明として「牧場体験学習を通じてた食育学習」をテーマに(有)山延牧場から山延眞智子さん、伊久江さん親子が講師として招かれ、三十年前から続けられている牧場体験学習とその効果について発信された。

広島県学校給食研究大会実行委員会

(県教育委員会・竹原市教育委員会・

広島県学校給食会・広島県牛乳普及協

会)は、平成二十六年広島県学校給

食研究大会を開催し、小学校、中学校、

高等学校、特別支援学校、学校給食協

同調理場及び市町教育委員会等の学校

「牛乳月間」の取り組みから のつながり

今回、この大会で事業説明の機会を得た背景には、六月九日に「牛乳月間」の取り組みとして県知事・県教育長を表敬訪問した際、「ときめき隊」より、酪農教育ファームや中学校の職場体験学習などで生徒・児童の受け入れ、食

育教育に精力的に取り組んでいる事を紹介したことがきっかけとなり、県教育委員会より、教育現場で食育を担う学校給食関係者らが集う今大会での事業説明の場を提供頂いた。

「牧場体験学習を通じて 学乳を広めたい」

講師の山延眞智子さん、伊久江さん親子は、(有)山延牧場で行っている牧場体験を通じた食育活動について、牧場での仕事内容の紹介や、実際の体験学習の内容から受け入れた生徒・児童の変化まで写真に沿って分かりやすく説明された。

同牧場での体験学習では受け入れる生徒・児童に併せて体験内容が分けられており、小学生は牧場見学やバター作り体験、「食」の勉強が行われており、中学生の職場体験学習では、朝五時半から牧場の掃除、餌やり、糞の処理を行った後、一時間半かけて四十五頭を搾乳、その後、仔牛のほ乳を行う。アイスやバター作り体験もあり、時期によっては獣医師による除角作業の見学や、運が良ければ分娩の手伝いも



小学生の体験学習

手作り資料で
より分かりやすく



バター作り体験

見学後の感想文

牧場の一日	
5:30	作業開始 糞の処理、糞かき、餌やり
7:30	搾乳
9:00	餌やり、仔牛への哺乳
10:00	午前中の作業終了
12:00	餌やり、糞かき、環境整備
14:30	午後の作業終了
17:30	糞の処理、糞かき、餌やり
19:30	搾乳
21:00	餌やり、仔牛への哺乳
22:00	一日の作業終了

中学生の体験



搾乳機5台を使用

1時間半かけ
45等搾乳

出来る。作業後の食事では、眞智子さんが牛乳料理を振る舞い、これには牛乳が苦手な生徒も喜んで食べられていると報告された。

■体験後の生徒・児童の感想■

1 「食」、「いのち」についての考え方

- ・人間は幸せな生き物、食事の時に感謝する気持ち
- ・獣医師やたくさんの人の力を借りて生まれてくる生命の尊さ、生物の力
- ・動物に直に触れることで生きている実感と命の重み
- ・食事を作る人の愛情を感じる

2 牛(人間)に対しての接し方

- ・いま自分に出来ることは、「自分や他人の命を粗末に扱わないこと」
- ・相手の立場になって考えることの大切さ
- ・挨拶で気持ちが変わる

3 責任感を持つことの大切さ

- ・少しの気のゆるみが牛の健康や経営に大きく影響する
- ・命を扱う責任の重さ

4 「やりがい」や「達成感」を感じる

- ・仕事にやりがいを感じていると、キツイことや辛いことがあっても頑張れる
- ・自主的に行動することで得られる達成感や「やりがい」がある

とが伺える。
職場体験学習は五日間行われ、牧場体験を通じて、参加した生徒・児童にどのような変化があったか、山延牧場へ寄せられた感想文や御礼の手紙の内容を交えて紹介された。主な内容は上記の通り。

■「牧場体験学習を始めたきっかけ」

生命産業である「酪農」の特性や技術を通して「食」・「心」・「いのち」の教育を支援したいという強い思いから、学生・企業の受け入れを三十年前から始められ、同様に中学校の職場体験学習の受け入れを二十年前より行われている。

牧場体験学習を通じて伝えたいことは、①食や「いのち」の大切さ、②仕事の意義、③相手を思いやる心、④仲間とのつながり、とされており、体験後の生徒・児童の感想文等からも、この効果が十分に得られていることが伺える。

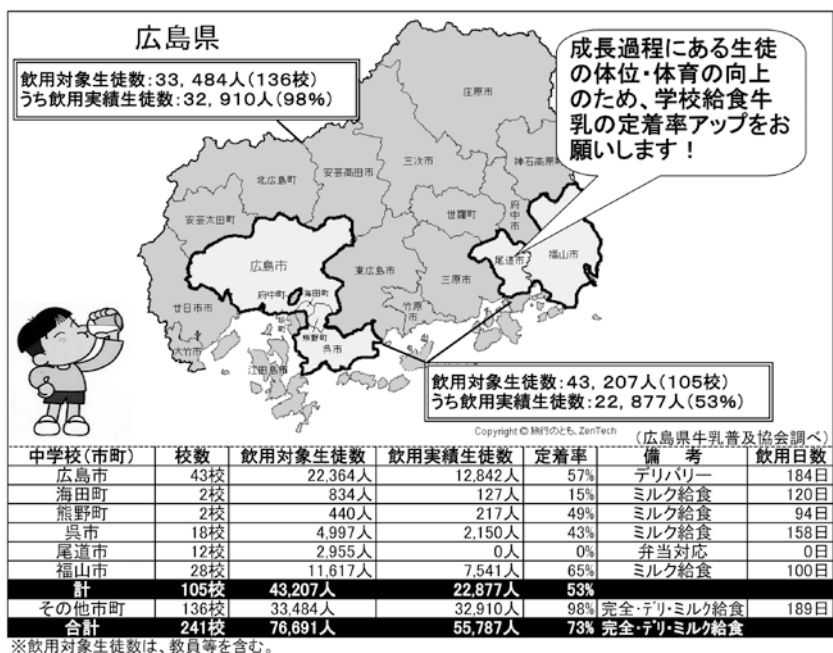
■まとめ

「牧場体験学習を通じた食育学習」の活動紹介を終えて、県教育委員会からは「普段知る機会の少ない部分を知ることが出来て非常に勉強になった。このことを参加者が学校等へ持ち帰り、牧場体験等を通じた食育授業へ活用されることに期待したい」との意見や、参加者からは「体験した生徒の感想文の一部を読まれた際、非常に暖かい内容で感動した」との感想も聞かれた。

今回、「広島県学校給食研究会実行委員会」で、広島県内の酪農家が小・中学生を対象とする職場体験学習の紹介ができたのも、六月の牛乳月間に併せて、湯崎知事、下崎教育長を訪問し、牛乳消費の普及活動にあたったことが端緒となり、小学校、中学

校、高等学校、特別支援学校等で調理に携わる関係者との「つながり」となったことに感謝したい。

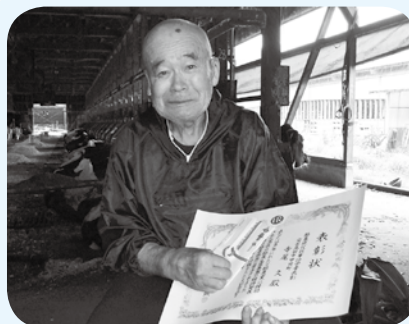
今後、県内の小・中学校などで、広島県産牛乳が広く愛飲され、普及定着して行くことを願ってやまない・・・。



【関連記事】
らくらのうだより六月号
No.二四三号 二か

酪農現役従事功労者表彰

祝 酪農現役従事者 5名を表彰 専務が各戸を訪問



◆寺尾 久さん
(安芸高田市甲田町)

平成元年に息子が酪農経営に携わったことをきっかけに、新しく現在の牛舎を建て50頭を飼育しています。「酪農経営では、妻と息子に厳しくあたっているが、よく頑張ってくれていると深く感謝している」とのお言葉でした。

今は飼料給与と哺育作業を担当され、最近は週に数回、デイスサービスに出かけることを楽しみにされています。



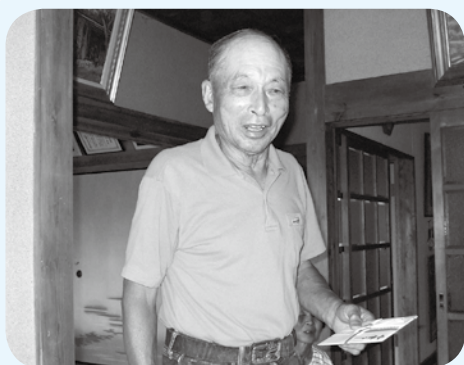
◆横山 文彰さん
(府中市上下町)

仔牛の飼育を担当されています。「邪魔をしない程度にぼちぼちやっています。息子(彰人さん)が優しいのでこうしてやれる。ありがたいことです」と、家族への感謝の言葉をお聞きしました。



◆平田サトエさん
(世羅郡世羅町)

「ボイラーが壊れたのでこれを機に廃業も考えましたが、ボイラーを買ってしまいました」と笑いながらも、「もう少し続けて頑張ろうと思います」と前向きなお言葉を頂きました。



◆大上 誠さん
(広島市佐伯区湯来町)

牧場経営では主に草地作業に携わり、地元酪農家で組織した共同草地作業も行われています。「一昨年、孫が結婚し、この夏、ひ孫が生まれ大変嬉しく、また、時々地元小学校からの依頼を受け、得意のアコーディオンを披露することも生きがい」と話されていました。



◆松井 泰彦さん
(東広島市安芸津町)

「定年2年前、息子の入院を期に1日考えて役場を退職し、酪農に従事する事となったが、その判断は間違っていなかった。組合からやめろと言われるまで酪農を続けたい」と力強いお言葉を頂きました。

WCS用稲の生産・利用推進研修会

(八月二十八日 みわ文化センター)

WCS用稲の特性を学び

耕種農家の協力を求める！

があった。

出席した岩竹重城組合長(広酪)は、広酪の飼料イネの取り組み等を交え挨拶し、飼料イネの作付け協力を呼びかけた。

「WCSを活用したTMRの利用」と題した講演で藏崎哲治課長補佐(広酪)は、広酪のWCS用稲確保に向けた取り組みと、それを利用したTMR製造について触れた。

研修会終了後は、広酪みわTMRセンターに会場を移し、圧縮梱包方式によるTMR製造施設の現地視察が行われた。

出席者の多くは、飼料イネを現状利用・生産されている方が多く、県立農業技術大学の生徒も参加され、県内の飼料イネ情勢等を学ばれていた。講演概要は以下のとおり。



広島県飼料稲活用・普及検討会(構成員…(一社)広島県畜産協会、広島県市町、全農広島県本部、広酪、農業協同組合)は、WCS用稲の生産・利用推進研修会を開催し、生産農家、畜産農家、関係団体を合わせ百九名の参加

(一)県内におけるWCS用稲の

生産・利用状況

広島県農林水産部畜産課

橋本専門員

・平成二十六年度広島県内の飼料イネ作付面積は二百七十九ha。前年に比べて百二十四%の増(平成二十五年度は二百二十五ha)。作付率は茎葉品種が九割以上を占め、「たちすずか」、「たちあやか」が主体。平成二十八年度の作付目標面積は三百四十五ha。

・県内の飼料イネWCS利用状況は酪農家四十五戸、肉用牛農家七十四戸。

(二)WCS用稲栽培・調製

より良い飼料供給のためには

(分析結果データより)

広島県立総合研究所畜産技術センター

飼養技術部 河野副部長

・飼料イネ栽培の留意点として雑草混入の弊害があり、①収量の低下、②作業効率の低下、③栄養価の低下、④有害成分の混入があげられる。

・平成二十五年度ではトビイロウンカの被害が多く、イノシシ等の害獣被害も発生したため、電柵設置・害虫対策等が必要である。

・農薬使用は、給与技術マニュアルに記載されている種類・使用方法を遵守すること。

(三)WCS用稲利用の留意事項

「たちすずか」の飼料特性と利用

広島県立総合研究所畜産技術センター

飼養技術部 城田専門員

・茎葉品種「たちすずか」は糖含量が高く、茎葉部に糖・デンプンが多い事が飼料特性である。不消化もみが少ないことで栄養ロスも少なく、以前の種子品種に比べて飼料利用もし易くなっている。

・TMR飼料混合量について、DMで三十%混合しても牛の成績に問題はなかった。

